

クルマ利用と まちの活気



かしこい Vol.9 クルマの使い方

藤井 聡

「三丁目の夕日」という映画がこのところ、人気を集めているようですが、続編も作られたようですが、これは、数十年昔の素朴な時代に、多くの人々が愛着や郷愁を感じているから、だと言えるのかもしれませんが。

あの頃の時代と今とは色々な違いがありそうですが、こと移動に関して言うなら、あの頃は誰もクルマを使っていなかったけれど今では誰もが使っている、という違いがあります。これは一見些細な違いに思えるかもしれませんが、よくよく考えると、時代の雰囲気を変えた大きな違いだ、とも言えることをご存じでしょうか？

もし人々がクルマを使わなければ、都市の人々は「郊外には住めない」ので、駅前などの「まち」の中にまとまって暮らすこととなります。そのため「まちの商店街」は活気づくこととなります。そして、大型ショッピングセ

ンターとは違って、近所の商店街でのお買い物へは、ほとんど毎日出かけます。皆がそうするので、人々の交流（社交）は、お買い物を通じて少しずつ豊かになっていきます。「余暇」の時間でも近所で過ごすことが増え、やはり、人々の間の豊かな交流が生まれていきます。こうして、クルマが無い社会では商店街もコミュニティもほぼ「自動的」に活気づき、「三丁目の夕日」の様な世界が広がっていくこととなるのです。ところが、人々がクルマに依存してしまえば、街は郊外に広がり、商店街は寂れて「シャッター街」になり、コミュニティも無くなって隣の人が何をしているか分からない様な「現代社会」に近づいていきます。こう考えれば、「まちの活気」を取り戻すためにも、一人一人ができるだけ歩いたりバスや電車を利用することは、とても大切なことなのだと考えそうですね。

藤井聡（ふじい・さとし）

東京工業大学教授。1988年奈良県生、京都大学卒業。フジテレビ「交通バラエティ・日本の歩き方」2003～2004年を監修。JAFMATE「交通百葉箱」2001～2002年に連載。著書「社会的ジレンマの処方箋」



ロンドンのバスは

世界バス紀行

中村 文彦

ちょっと手強い

イギリスの首都ロンドンには、6000台のバスが市内を縦横に走り回る、世界最大の路線バス王国ともいえる大都市です。多くのバスは、写真のように有名な2階立てのバスで、観光客にも評判です。昔ながらの街並みが多く残っているロンドンには、実は東京などと比べても道路の幅員は広くないところが多く、その中をバスの巨体がまさに縫うように走っています。

最近では、ロードプライシング（道路課金）、現地ではコンジェスチョン・チャージング（混雑課金）と

いうことで、ロンドン都心に入る自家用車はおおよそ2000円以上を支払うというルールのため、道路混雑は緩和されていますが、それでも混んでいる道路の中でバスが遅れてしまう場面はあります。バス専用レーンを一般の車が違法に走行することや違法な路上駐車などが、バスの遅れに大きく影響します。

そこででた新兵器が「バスカメラ」です。バスの前面に、前方を撮影するカメラが設置されていて、違法走行車両や違法路上駐車をバスから撮影でき、摘発に利用できるということです。行き先表示盤の、向かって右側のところに埋め込まれています（わかりにくいけど拡大写真参照）。

この技術は、シンガポールにもあります。そして、実は東京でも最近、試行的に導入され、現在、効果の検証が進められています。

でも、こんなものを必要としないくらいのマナーを日本人は持っていたはずなんですけどね。



中村 文彦（なかむら ふみひこ）
横浜国立大学大学院工学研究院教授。東京大学卒業。専門は都市計画、都市交通計画、公共交通政策など